目が合うということ

話す以前のコミュニケーションの研究 /A Study on Getting Familar Face to Face

高橋　凜太郎

話す以前のコミュニケーションの研究

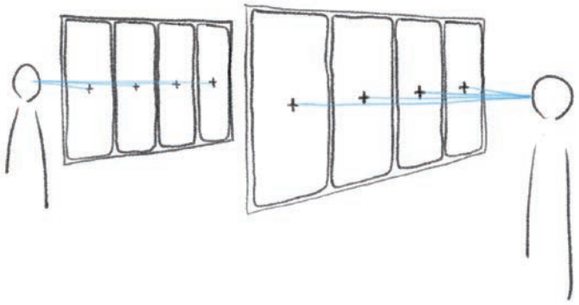
リモート〇〇が普及した現代、「なんとなく知っている人」が減ってきた。今回研究したのは、なんとなく知り合う機会の誘発だ。特に初対面時の言語外のコミュニケーションに注目し、目線を主軸に置いたビデオ通信を構想した。初対面時の「目線」を使ったコミュニケーションは短時間で膨大な量の情報をやり取りしている。

A Study on Getting Familar Face to Face

We have fewer acquaintances in this era of remote everything. In my project, I explored a framework to create a chance to get familiar with one other, using nonverbal communication in the first encounter. I designed a video communication system focused on eye contact. When you meet someone for the first time, eye contact communication is brief but carries a tremendous amount of information both ways.

1

2



1 長期間での「目が合う」
今回の提案は長期で定期的に目を合わせることで、親しみやすさや信頼感を当事者間で築くということを狙っている。
大きく警戒から始まり、お互いを確認し合い相手に対する安心感を徐々に生み出す。

* ヨッ友：なんとなく知っている友達

2「目を合わせないという意思表示」
４枚に分割された画面それぞれの中央にカメラ穴が設置してあることにより、画面の向こうの相手と目線を合わせることができる。双方に意思表示ができるために初対面で細かな非言語コミュニケーションを行える。また、リモート接続のディスプレイという壁を相手との間に設けることで、コミュニケーションのハードルを下げる。